

広島大学学術情報リポジトリ

Hiroshima University Institutional Repository

Title	高校生と交換留学生の異文化間インタラクションの挑戦：異文化理解教育推進プログラム「吉舎おもてなしプラン」国際交流
Author(s)	恒松, 直美
Citation	広島県立日彰館高等学校研究紀要, 18 : 51 - 64
Issue Date	2021-03
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00054114
Right	この論文は出版社版ではありません。引用の際には出版社版をご確認、ご利用ください。
Relation	



高校生と交換留学生の異文化間インタラクションの挑戦 ～異文化理解教育推進プログラム「吉舎おもてなしプラン」国際交流～

広島大学森戸国際高等教育学院 恒松直美

はじめに

本稿では、2015年度より広島県立日彰館高等学校において開催してきた広島県立日彰館高等学校と広島大学短期交換留学プログラム留学生（HUSA）¹との「吉舎おもてなしプラン」国際交流会を振り返り、高校生の体験に焦点を当て、異文化間インタラクションにおける課題について考察してみたい。参加者の意見も参照しつつ、本交流会における異文化間接触の現状について考察し、今後、意義ある発展につなげていくことを目指す。

異文化間接触の場を創ることを目的として発展させてきた本国際交流会は2020年度で6回目を迎えた。留学生による高等学校訪問・日本文化体験・ホームステイを盛り込んだ「吉舎おもてなしプラン」が2014年度に開始され、2015年度からは学校の全体行事として国際交流行事が導入され、2020年度までに6回の国際交流会が開催された。筆者は、2019年度より「異文化理解教育推進委員」として、異文化間接触の場の教育的発展について検討してきた。また過去5年間にわたり国際交流会の企画と司会・進行を担当する中、1年に1回開催される本行事において、高校生と交換留学生との異文化間インタラクションをいかにして起こし得るかを現場での観察に基づき発展させてきた。試行錯誤することも多く、各回の高校生と留学生の反応とインタラクションの観察をもとに、改善策を講じてきた。数百名の高校生と留学生とが交流の場を持ち、多くの交換留学生が日本の地域学校の生徒とホストファミリーとの思い出を胸に帰国したことは感慨深い。

2020年度は、新型コロナ禍により、いつでも意図すれば開催可能と思われてきた対面の国際交流企画の開催が困難な事態となった。現在、異文化間交流も含め、人と人との交流や体験型学習を従来の形式で企画し実行することが常に不確定になっている。企画しても常に延期や中止の可能性を想定して準備することが不可避となった。大学の国際的流動性が揺らぎ、国境がいつ閉鎖されるか予測不可能な事態の中、留学の実現可能性も不確定となった。一部の留学生は2020年11月より2か月の間に入国が許可されたが、2021年2月現在、再度、外国人留学生は入国禁止となっている。現状況下、対面の国際交流の開催については、第一に、留学生の参加可能性、第二に安全性の観点からの国際交流行事開催の妥当性、に関して常に適切な判断が迫られる。では、今まで開催の意思があれば開催可能であった国際交

¹ 以後、「広島大学短期交換留学プログラム(Hiroshima University Study Abroad Program)」を「HUSAプログラム」と称する。広島大学は、北米・ヨーロッパ・オセアニア・アジアの31か国の95大学及びUSAC(University Studies Abroad Consortium)とUMAP(University Mobility in Asia and Pacific)の2コンソーシアムと協定を締結し、これまで911名が参加している(2021年1月時点)。1996より開始され、毎年約40~60名の留学生が「HUSAプログラム交換留学生」として広島大学において1年間または1学期学んでいる。

流会は何を意味していたのか。大学・学校が従来の対面の授業方法を転換し、オンラインも導入したハイブリッド方式や新しい教育方法を開拓する状況におかれた今、対面で留学生と地域学校の生徒が接触していた国際交流会は何をもたらしていたのか。これらの異文化接触の場が当然の場ではなくなった今、その意義と示唆について振り返り再考してみたい。「吉舎おもてなしプラン」に関わり、留学生の訪問に目を輝かせている高校生と日本文化に触れ生き生きとした留学生の姿を見た者として、異文化接触の現場における課題を探り出し、今後につなげていくことを目指したい。

「吉舎おもてなしプラン」国際交流行事の発展

2014年より「吉舎おもてなしプラン」が開始され、2015年より毎年11月に国際交流行事の企画と当日の司会・進行を担当してきた。本年度の2020年11月までに国際交流会を6回担当し、高校生と交換留学生との異文化間接触の現場を観察してきた。交流会の参加者の反応とインタラクションは予想外のこともあり、現場での体験をもとに、いかにすれば異文化間インタラクションが起こるかを検討しつつ改善を重ねてきた。数百名の高校生と留学生との異文化間接触の場はいかに構築できるか、接触現場における課題は何かを検討しつつ実行を重ねる中、新しい発見も多くあった。

以下に、「平成30年度吉舎おもてなしプラン」の概要を提示した。一例として2018年度を提示した。留学生の日彰館高校到着後の2日間の概要は毎年ほぼ同様である。

<吉舎おもてなしプラン概要（平成30年度）>

- (1) HUSA プログラム留学生と1学年との交流会(10:30-11:15)
 - * 昔遊びの紹介
- (2) 昼食会・餅つき体験 (11:25-12:35)
 - * 地域団体・PTAによる支援
- (3) 国際交流行事全体会 (12:50-14:00)
 - * HUSA プログラム留学生・全学年生徒・教員による参加
- (4) 吉舎街歩きガイドツアー (14:15-15:40)
 - * 高校生による留学生の街歩きガイド —吉舎町の魅力を紹介—
- (5) 文化体験 (15:45-16:45)
 - * 書道・茶道・年賀状作成
- (6) ホストファミリー対面式 (17:00-18:40)

以下に、上記の(3)国際交流行事全体会の各年度の内容を示し、各国際交流行事のテーマ・目標・参加者・行事内容についてまとめた。

1) 2014年度 2014年11月1日(土)

参加者：広島県立日彰館高校生徒1年~3年生 (合計221名)

HUSA プログラム交換留学生 (合計26名)

*出身国：アメリカ(5), インドネシア(1), オーストラリア(1), 韓国(1), 台湾(2), 中国(7), カナダ(2), フィリピン(1), フィンランド(1), フランス(2), ベネズエラ(1), ポーランド(1), ロシア(1)

*国際交流会は,初年度の2014年度は開催せず,2年目の2015年より筆者が企画を開始した。以来,毎年,当日の司会・進行を英語と日本語で担当している。

2) 2015年度 2015年11月7日(土)

参加者：広島県立日彰館高校生徒1年~3年生 (合計223名)

HUSAプログラム交換留学生(合計22名)

*出身国：アメリカ(4), インドネシア(2), オーストラリア(2), オランダ(1), 韓国(2), 台湾(2), 中国(2), ドイツ(3), ニュージーランド(1), フィリピン(1), フランス(1), ルーマニア(1)

目標：異文化を持った人に対する心理的バリアーを取り払う

キーワード：「その場で考え意見を述べる」, 「準備のない世界の体験」, 「容赦のない本場の体験」

<国際交流会の内容>

1. 留学生日本語スピーチ 「日本語初級II」受講生から3名 15分

出身国：オーストラリア, アメリカ, ドイツ

2. 質問クイズ・伝言ゲーム(英語・日本語) 30分

(1)絵カードを使用したクイズ

*留学生に絵カードを見せ,高校生から質問し,絵カードの内容をあてる。

高校生は,日本語または英語で質問をする。

(2)高校生からクイズ

(3)伝言ゲーム



3) 2016年度 2016年11月12日(土)

参加者：広島県立日彰館高校生徒1年~3年生 (合計218名)

HUSAプログラム交換留学生(合計30名)

*出身国：アメリカ(4), インドネシア(2), オーストラリア(1), オランダ(1), 韓国(3), タイ(1), 台湾(4), 中国(10), フィリピン(1), フィンランド(1), メキシコ(2)

テーマ：「容赦のない本物の体験」

目的：異文化を持った人々との交流活動を経験して,自らへの自身を持ち,自分の母校や地域につ

いて語ることができる生徒を育てる。不安に打ち克ち、今まで学んだことを生かして新しいことにチャレンジしていく生徒を育てる。授業で学んだ英語表現を実践的に使うことを通して、コミュニケーション能力の向上を実感させるとともに今後の学習意欲を高める。

<国際交流会の内容>

1. 留学生日本語スピーチ 「日本語初級Ⅱ」受講生から3名 15分

出身国：メキシコ、アメリカ

2. 質問クイズ・伝言ゲーム（英語・日本語）30分

(1)絵カードを使用したクイズ

* 留学生に絵カードを見せ、高校生から質問し、絵カードの内容をあてる。

高校生は、日本語または英語で質問をする。

(2)高校生からクイズ

(3)伝言ゲーム



4) 2017年度 2017年11月11日(土)

参加者： 広島県立日影館高校生徒 1年~3年生 (合計214名)

HUSAプログラム交換留学生(合計20名)

* 出身国：アメリカ(1)、オーストリア(1)、台湾(4)、中国(7)、スウェーデン(1)、ドイツ(2)、フィンランド(2)、フランス(1)、香港(1)

テーマ：「一人ひとりが日本の先生」

目的：本校の学校経営計画の柱である、「グローバルな視野を持って、地域に貢献できる生徒の育成」に向けて取り組む「グローバル人材育成プログラム120」の一環として実施する。今年度で(「吉舎おもてなしプラン」は)4年目。第1学年の生徒が、広島大学短期交換留学プログラム(HUSA)の留学生を対象に、古き良き日本文化の残る吉舎町へ招待する「吉舎おもてなしプラン」を企画し、応募者に対して吉舎町や日本文化の魅力等をアピールする。

<国際交流会の内容>

1. 留学生日本語スピーチ 「日本語初級Ⅱ」受講生から2名 15分

出身国：フィンランド、台湾

2. 質問クイズ・借り物ゲーム（英語・日本語）30分

(1)絵カードを使用したクイズ

*留学生に絵カードを見せ,高校生から質問し,絵カードの内容をあてる。

高校生は,日本語または英語で質問をする。

(2)高校生からクイズ

(3)借り物ゲーム



5) 2018年度 2018年11月10日(土)

参加者：広島県立日彰館高校生徒 1年~3年生(合計222名)

三次市立吉舎中学校16名

HUSAプログラム交換留学生(合計50名)

*出身国：アメリカ(6), イギリス(1), インドネシア(3), オランダ(1), 韓国(3), タイ(1), 台湾(11), 中国(9), スペイン(1), ドイツ(3), ニュージーランド(1), フィリピン(1), フィンランド(3), フランス(2), メキシコ(1), ロシア(3)

テーマ：「吉舎で」おもてなし

目的：次の3つの資質能力を高める。

- ① 知識と他者の考えを求める主体性
- ② 多様な意見を受け止め自らを関わらせる力
- ③ ヒト・モノ・コトの背景に触れ吉舎で学ぶ意味につなげる志向性

<国際交流会の内容>

1. 留学生日本語スピーチ「日本語初級Ⅱ」受講生から2名 5分

出身国：アメリカ, ニュージーランド

2. グループアクティビティ（英語・日本語）40分

高校生4名+留学生1~2名のグループを39構成

- (1)グループ内で自己紹介
- (2)留学生・高校生に関する質問
- (3)絵カードを使用したクイズ
- (4)高校生からクイズ





6) 2019年度 2019年11月9日(土)

参加者：広島県立日影館高校生徒 1年~3年生 (合計 220名)

三次市吉舎中学校 15名

HUSA プログラム交換留学生 (合計 45名)

*出身国：アメリカ(10), イギリス(2), インドネシア(2), オーストラリア(3), オランダ(1), 韓国(2), タイ(1), 台湾(7), 中国(8), ドイツ(4), ニュージーランド(1), フィンランド(1), フランス(2), マレーシア(1)

テーマ：「吉舎で」おもてなし

目的：次の3つの資質能力を高める。

- ① 知識と他者の考えを求める主体性を高める
- ② 多様な意見を受け止め自らを関わらせる力を高める
- ③ ヒト・モノ・コトの背景に触れ吉舎で学ぶ意味につなげる志向性を高める

<国際交流会の内容>

1. 留学生日本語スピーチ 「日本語初級Ⅱ」受講生から2名 5分 出身国：アメリカ,台湾

2. グループアクティビティ (英語・日本語) 40分

高校生4名~6名+留学生1~2名のグループを39構成

- (1)グループ内で自己紹介
- (2) 留学生・高校生に関する質問
- (3) 絵カードを使用したクイズ
- (4) 高校生からクイズ





7) 2020年度 2020年11月20日(金)

参加者：広島県立日彰館高校生徒 1年~3年生(合計202名)

教職員20名, 三次市立吉舎中学校19名, 三次市立八幡

小学校8名, 三次市立吉舎小学校19名, ホストファミリー5組9名(日彰館 高校在籍
生徒4組, 地域住民1組)

広島大学HUSAプログラム交換留学生・広島大学共創学科学生(合計19名)

*「グローバル・インターンシップ」・「Japanese Society and Gender Issues」受講生

出身国：アメリカ(1), インドネシア(4), 台湾(2), 中国(2), ドイツ(2), フランス(1), ルーマニア(2), 日本(5)

視察： 広島県教育委員会高校教育指導課 1名

テーマ：「今だからこそ～つなぐ・つながる田舎主義～」

目的：学校全体で育成する次の資質・能力の向上を育成する。

(1) 知識と他者の考えを求める主体性 [①知識・理解 ②主体性 ③探求心]

(2) 多様な意見を受け止め自らを関与させる力 [①受容力 ②判断力 ③コミュニケーションする
(伝える・伝わる)力]

<国際交流会の内容>

1. 留学生日本語スピーチ 「グローバル・インターンシップ」受講生から2名 5分

出身国：ルーマニア, ドイツ

2. 日本語スキット「グローバル・インターンシップ」受講生 10分

3. 高校生からクイズ 10分

*高校生6グループから質問



新型コロナ禍とオンライン国際交流会～「吉舎おもてなしプラン」の新しい可能性

2020年度は、新型コロナ禍の影響により、これまで続けてきた吉舎おもてなしプラン国際交流行事を新しく再構築する必要性に迫られた。当初、広島大学短期交換留学プログラム(HUSA)留学生の2020年度の来日の実現性も不確実となり、それに伴い、国際交流行事開催の実現可能性も不確定となった。本来であれば9月末に来日するHUSAプログラム留学生は、まずオンライン授業への参加を開始し、日本への入国許可が出た時点で来日することとなった。対面での国際交流会の開催が困難な現実に鑑み、来日できない状況を想定し、オンライン開催に挑む方向で動き始めた。海外にいる留学生がオンラインで参加した場合、時差により参加が難しいケースもあり、留学生の参加が懸念事項となった。

日彰館高等学校と協議を重ねつつ、これまでとほぼ同様の内容の国際交流行事を本年度も実現させるべく進めることとした。当日は、日彰館高等学校、三次市立吉舎中学校、三次市立吉舎小学校、三次市立八幡小学校をオンラインでつなぎ、地域のホストファミリーと広島県教育委員会からも参加を得て約270名の参加者による大規模なオンライン国際交流会を開催するに至った。オンラインであるからこそ小学校・中学校・高校の複数の学校をつなぐ交流が実現できた面もあり、新しい可能性も見えてきた。マイクの不具合や、インタラクティブの際にマイクの位置まで生徒が移動するのに多少時間がかかるなど、オンラインでの行事開催に不慣れなことから起こる課題もあった。しかし、これらはオンラインによる様々な形態に慣れる段階で避けて通れない学びの過程である。筆者も2020年度の授業・セミナー・学会参加等において同様の問題を経験及び観察した。2020年度は、初めてオンライン国際学会で研究発表をする機会を持ったが、3日間の学会では世界各国の研究者が

様々なオンラインの課題に直面する場面があった。大規模な国際交流会での多少の不具合や予想外の課題の発生は当然と言えよう。

新型コロナ禍の交換留学における時空を超えた留学生と地域社会とのつながり構築

本年度の新型コロナ禍は不測の事態をもたらし、学校教育及び大学教育は多大な影響を受けている。大学の国際流動性は停滞し、世界の大学における本来の「留学」は、常に不確定となり、学生も先行きが見えない状況におかれた。交換留学システムの継続性が揺らぎ、留学の希望者または予定者はその不確定な実現可能性を常に懸念しつつ、不確定要素に備えて対応せざるを得ない。2020年2月にはHUSAプログラムを通じ本学から海外の協定大学に派遣していた多くの学生が交換留学を中断し日本に途中帰国する事態に見舞われた。また、2020年2月から3月にかけて、HUSAプログラムで海外の協定大学から広島大学に交換留学していた留学生の一部に帰国指示や帰国の助言が出された。留学のホスト国の日本で人との交流が制限される状況下、日本滞在の意義に疑問を抱き自ら帰国を選択する留学生も出た。2020年は、本国の大学からの指示や助言、または自身の選択により、人生の夢であった留学を断念せざるを得ない状況におかれた学生が続出した年となった。

2020年度春学期の広島大学での留学生受入れについても、協定大学より派遣見送りの連絡が相次ぎ、日本政府による留学生の入国許可もいつおりのか不確定となった。HUSAプログラム受け入れ留学生は、通常4月に受け入れが決定し9月末に来日予定であるが、2020-2021年度は、春から夏に向けてプログラム参加キャンセルの連絡が届き始めた。通常は渡日に向けて胸を躍らせ日本留学の準備をする時期である。9月時点で当初受け入れ予定であった交換留学生60名は20名にまで減少した。その現状に鑑み、「おもてなし国際交流行事」への参加者の募集の対象学生をHUSAプログラム留学生から、筆者の担当授業「Glocal Internship (グローバル・インターンシップ)」・「Japanese Society and Gender Issues (日本社会とジェンダー)」の受講学生(HUSAプログラム留学生・国際共創学科の学生)に変更した。

10月によりやく留学生の日本入国の許可がおり初め、11月中旬より留学生の来日が可能となった。2020年11月20日に開催された「吉舎おもてなしプラン」国際交流行事への広島大学からの参加者は、渡日後の隔離中の東京のホテルにいる留学生、来日直前でまだ自国にいる留学生、既に広島大学で勉学している学生となった。新型コロナ禍においても来日した留学生は、人との交流が制限される状況下でもホスト国での滞在に価値があるとしている。2020年度の複数の学校をつないだオンライン国際交流会は、オンラインであるからこそ実現可能な新しい国際交流会の形態ともなった。時空を超えて広島大学の学生と日本の高校生・中学生・小学生・教職員・地域関係者がつながる場が、オンライン交流会によって創り出され新しい体験をもたらした。学校に集まったホストファミリーの紹介場面では、これまでホームステイした留学生の写真を見せ、懐かしく振り返る場面もあった。これらはオンラインならではの体験である。

国際交流における高校生と留学生との異文化間接触

国際交流会における高校生と交換留学生との異文化間接触の観察に基づき、国際交流の場で異文化間接触を起こそうとする教育者が認識すべき重要な課題について整理しておきたい。異文化間接触は自然発生的に起こるわけではないことは多くの学術研究で論じられてきた。また、留学中における留学生と留学先のホスト国の人々との異文化間接触も起こりにくいことが指摘されてきた (Page and Chahboun: 2019)。De Wit (2015: xiv) は、留学により自動的に異文化間理解の学習成果が高められるわけではないと主張し、Bennett (2015) も、新しい文化に没入した自然の結果として異文化間理解が起こるわけではないと論じる。つまり、留学生が日本の大学に留学した結果として異文化間理解が自然発生的に起こるわけではないとの想定ができる。「おもてなし国際交流行事」の開催は、高校生と留学生とが同じ会場に集う場を設定した段階に過ぎず、異文化間接触が実証されたことにはならない。異文化間接触は自然発生的には起こりにくいとの認識がまず重要であり、現状を把握したうえで次の施策を練ることが求められる。

国際交流会での異文化間接触に携わる教育者が認識すべき重要課題として、**第一に、異文化との接触経験がない場合、接触方法が分からず生徒が戸惑うこと**の理解である。これはコミュニケーション言語による問題に限定されない。現に、これまでの国際交流会で司会をした際、中学校生徒が日本語能力が上級の留学生と小グループで対面しても話そうとはしなかった (恒松: 2015)。言語能力習得イコール異文化コンピテンス習得ではない。Bennet (2012: 96) は、非言語行動やコミュニケーションスタイル、文化的価値観に関する知識自体が異文化間理解能力を意味するわけではないと述べ、情報を活用する方法を習得しなければ習得した知識を生かせないと論じている。異文化を理解するための概念の知識自体が、現場での異文化間能力の発揮に直結するわけではない。

高校生からの、「話そうという気があり、目が合うが、話せない」、「留学生も緊張していて気まずい雰囲気になり、相手側にも申し訳ない」、「留学生と何を話したらいいのか分からずぎこちなかった」、「慣れていないことから沈黙になる」、「自信がないため (国際交流会で) 今まであまり留学生と関わらず接していない」との感想は、異文化圏の人を前にし、相手の背景とそれに適した対応方法が分からないことに起因する戸惑いである。1年から3年までの国際交流会での体験が留学生と関わる自信をなくす場とならないためにも、未知の異文化の相手と対峙した際のコミュニケーション方法の学びは重要となろう。

同じ場を共有すれば、異文化間接触が自然発生的に起こるわけではない事例として、国際交流行事後の各家庭でのホームステイの体験がある。本ホームステイは、留学生がホストファミリーと過ごし、日本の家庭を体験する貴重な思い出となる場である。しかし、各家庭での異文化間インタラクションは不可視である。中国人留学生がアメリカ人留学生と同じホストファミリーの家で過ごした際、共通言語でコミュニケーションがとれないため、同じ家の中で話をせずぎこちなかった経験に言及した。ホストファミリーとの時間でどのような異文化間接触が起こっているのかについては、あまり明らかにされてこなかった。今後可視化していくことが重要となろう。

第二に、双方の言語的背景を双方がどう認識しているかが、コミュニケーションに影響を与

える点である。高校生が「英語でないと伝わらない、と思っていた」と感想を述べたように、留学生との交流では英語で話さなければならないと思込んでいる生徒は多い。留学生からも同様の指摘がある(恒松: 2005)。「日本語でも伝わるかな、という不安があったので、安心できるところがない」からは、留学生の言語背景が分からないことからくる戸惑いが伺える。異文化圏の相手と対峙し、言語背景の情報がない場合、異文化間接触への不安もあり、相手との関わり方がつかめなくなる傾向にある。「自分の日本語も変。相手の人が分かる日本語が伝わっていないと思った」からは、母国語の日本語について「相手が分かる日本語」を話せるよう模索する姿が伺える。「(留学生が)何が分からないのかが理解できなかった。この単語がわからない、とか教えてくれていた」から、異文化コミュニケーションにおいて、留学生の反応から糸口をつかめる感触を持っていることが分かる。

第三に、生徒が第一歩を踏み出しやすい場作りの重要性である。生徒から、「グループで話す場」が良かったとの意見があった。2018年度より、全体での国際交流会の中に、5~6人の小グループで自己紹介や質問への回答を話し合う時間を作った。全体場で述べるより、少人数で接するほうが話しかけやすいと述べた。また、「台湾語で名前をどういふのかと聞いた」と述べ、グループで自己紹介から入ると話しやすいとの感想があった。「小さいグループのセッションにしなければ、一切何もしない子どもでてくる」、「接する機会があったほうがいい」など、何らかの形で留学生と接する意義を強調した。

また、接触場面では、設定された簡単な質問はできるが、質問に答えた後、その次が続かないとの意見もあった。「自分から行ける子はコミュニケーションがとれるが、接するのに慣れていない子は何人かで話しかけに行くと接しないとできない」から、異文化圏の人との接触が日常ではないことが分かる。2017年の1年次から3回参加した3年生の生徒は、「(小グループを作った今年は)3年間の中で言えば、よく日本語も飛び交っていたし、英語も文章になってはいないかもしれないが、飛び交っていた」とインタラクションが生じたことを高く評価している。「引っ掛かっていく。無理やり、気持ちで伝えていく。知っている英語を駆使すれば大丈夫。あきらめずに」からは、少人数での接触の場が作られたことで、勇気を出し努力すれば留学生と意思の疎通が可能との認識への変化が見られる。国際交流会の小グループでの関わりが、勇気を出して一歩踏み出す場となっている。

第四に、異文化間接触の体験からの学びを継承・発展していける学校内の仕組み作りがもたらす教育的効果である。現在、主に1年生が中心となりおもてなしプランを実施する体制が組まれており、異文化間接触の体験を高校生活の初期段階から持てる。剣道部・書道部・茶華道部が参加した年もあるが、書道・茶道・年賀状作りなどの文化体験では、主に1年生が参加し留学生と交流している。国際交流会前の餅つき体験と昼食会も1年生が留学生と一緒にグループになって食べる。「吉舎おもてなしプラン」国際交流会は全学年が参加する約1時間の行事であるが、在學生は1年次から3年次まで3回体験することになる。国際交流行事のイメージを1年生が持ちやすいように経験者の2年生が経験を伝える機会も作られている。今後の課題は、継承するシステムの中で、異文化間理解の学びを学年間で相互に深め合い、支援し合える仕組みを作ることであろう。

第五は、生徒の新しい可能性を引き出す教育現場として異文化接触を捉える視点である。Deardorff (2015: 33)は、国際教育の学習成果の評価において、教育者と評価専門家が理解すべ

き以下の重要点を指摘する。1.知識の超越,2.体験学習,3.批判的リフレクション,4.複雑な成果,5.学習の発展的かつ生涯学習的な性質,6.学習への意図的な介入の重要性,7.インタラクティブな要素の導入,8.よりホリスティックな観点,である。国際教育における,規定された枠組みを超え,新しい視野から異文化間の関りを捉える重要性の指摘である。

観察した高校教員から「全体会の生徒の様子をみると生き生きしてみえる」,「子供(高校生)の違う面がでてきた」,「普段と様子が違って嬉しかった」,などの感想があった。「(国際交流会で大学教員が)あててくださった子が,なかなか(高校)教員のいうことをきかない。先生(大学教員)が声をかけると,やってみたりする。ああいう面を見ると,本人も変わるところがあるかな,と思う」が示すように,異文化間接触がもたらす新しい環境で生徒が新しい面を見せ始めるとの声は,異文化間接触が生徒の持つ潜在的な力を引き出す新しい教育現場となる可能性を示唆しているのではないか。また,地域中学校と多国籍交換留学生の国際交流会(恒松:2015)においても,中学校教員より,普段おとなしい生徒が国際交流会で生き生きと英語で発言したり,留学生とのゲームで自ら前に出て行ったりする姿について言及した。中学校生徒の「一生に一回くらいの経験ができたことに感動した」との感想にあるように,生徒には多国籍留学生との異文化間接触は一生に一回しかないと思うほどの非日常的かつ貴重な体験なのである。またとない機会であるからこそ,普段とは違う勇気を出したいと思った生徒もいたのではないか。Deardorff(2015)の「1.知識の超越」,「2.体験学習」,「4.複雑な成果」,「8.よりホリスティックな観点」にあるように,普段会うことのない留学生や大学教員と接触する新しい体験をもたらす国際交流会が,生徒自身が持つ未発見の部分を予想外の形で引き出している。また,高校教員にとっても平素は見ることのない生徒の新しい面を発見する新鮮な体験となっている。

普段と異なる教育方法に出会う体験は,学びの意味や世界観にも揺さぶりをかける。高校教員からの「先生のあの持っていき方,見ていて楽しくて」,「いつもルールでやっていて,それに慣れているから(国際交流会で)困っていた。困って,うんともすんとも言わない人がいた」は,異文化間インタラクションを引き出す場で新しい教授法に直面し戸惑う生徒の観察である。本国際交流会は,決められた枠組みから生徒が一步踏み出す新しい体験をする挑戦の場となっている。Deardorff(2015)の「6.学習への意図的な介入の重要性」にあるように,臨機応変にインタラクションすることが求められる異文化接触の場を意図的に作り出してきたが,教育的介入にも様々な方法があり,今後も模索は続く。

結語

パラダイム転換を必要とする国際教育は,新型コロナ禍によりますます新しい挑戦を模索する必要に迫られている。「留学生」は,ホスト国に移動し,そこで教育を受けることで,留学目的の一つである異文化体験を持てると想定されてきた。しかし,今,異文化間の移動が困難かつ不確定となり,「留学」が揺らいでいる。ホスト国への移動が困難となった今,異文化間接触はいかにしてあり得るのか。これまで,異文化間接触についての考察は,「留学」によるホスト国への移動が前提としてあった。では,ホスト国に移動できていた留学生は,どのような異文化間接触を持ち得ていたのか。より教育的介入が必要であったので

はないか。今後、移動に左右されない異文化間接触の学びはあり得るのか。今後は新しいパラダイムで国際教育を捉え、異文化間理解の課題を再考することが求められる。

Deardorff (2016: 86–88)は、異文化間理解の発展のためには、学習者に焦点を当てた異文化間理解の評価が必要であると強調する。Pop, Reynolds & Mueller (2014: 50-51)は、世界観の変容や変革的な学習のためには、長期的かつ拡大した教育プログラムや教育的介入が必要であると述べる。さらに、目的の明確化と深い学びをもたらす維持するアクティビティやトレーニング等の教育的介入についての研究の必要性と、リスクの覚悟と信念の飛躍を必要とする現状への挑戦となるパラダイム転換の重要性を論じている。

地域学校における大規模な国際交流会開催には、学校生徒と留学生の異文化間接触のみではなく、学校内の連携及び学校と地域との協力体制づくりの課題もある。今後、学校・大学・地域社会をつなぐ人の力は、より重要性を増していく。生徒は否が応でもグローバル社会の中で生きていかなければならない。新型コロナ禍により教育方法の転換が求められる中、新しい形で海外の高校や世界と連携する教育の発展も必要となろう。学校関係者や地域社会の人々との協力により実現してきた異文化理解教育推進プログラムは、今後どのような意義をもたらす得るのか。新しい視野からパラダイム・シフトして捉え直すことも新しい発展をもたらす鍵となるであろう。

参考文献

Bennett, M. J. (2012). Paradigmatic assumptions and a developmental approach to intercultural learning. In M. Vande Berg, R. M. Paige, & K. H. Lou (Eds.), *Student learning abroad: What our students are learning, what they're not, and what we can do about it* (pp. 90–114). Sterling, VA: Stylus Publishing.

Bennett, J. M. (Ed.). (2015). *The SAGE encyclopedia of intercultural competence, Vol. 2*. Los Angeles, CA: Sage Publications.

De Wit, H. (2015). Forward 2. In D.K. Deardorff (Ed.), *Demystifying outcomes assessment for international educators: A practical approach*. Sterling, VA: Stylus Publishing.

Deardorff, D.K. (2015). *Demystifying outcomes assessment for international educators: A practical approach*. Sterling, VA: Stylus Publishing.

Deardorff, D. K. (2016). Outcome assessment in international education. In E. Jones, R. Coelen, J. Beelen, & H. de Wit (Eds.), *Global and local internationalization* (pp. 83–89). Rotterdam: Sense Publishers.

Page, A. G., & Chahboun, S. (2019). Emerging empowerment of international students: How international student literature has shifted to include the students' voices. *Higher Education*, 78, 871–885.

Pope, R. L., Reynolds, A.L., & Mueller, J.A. (2014). *Creating multicultural change on campus*. San Francisco, CA: Jossey-Bass.

恒松直美 (2005) 「日本社会における異文化理解：留学生の視点—国際交流 広島大学短期交換留学 プログラム留学生日本語スピーチ発表会「広島大学留学生から見た日本」を開催して—」『広島大学留学生センター紀要』No. 15, pp. 37-62.

恒松直美 (2015) 「地方の中学校と留学生の異文化間接触 —地域に変革をもたらす交換留学生インターンシップ—」 『広島大学国際センター紀要』第5号, pp.19-33.

謝辞

2014年度より,多くの皆様のご協力・ご支援により異文化理解教育推進プログラム「吉舎おもてなしプラン」が実現されてきた。これまで広島大学短期交換留学プログラム(HUSA)留学生を暖かく迎えてくださった広島県立日彰館高等学校の教職員・生徒・PTAの皆様,新しい文化体験を創ってくださっている三次市立吉舎中学校・八幡小学校・吉舎小学校の皆様,留学生に食事やお餅つき体験をご提供下さった吉舎町自治振興連合会・安田自治振興会むつみ会・PTA 総務部の皆様,吉舎町と近隣の地域のホストファミリーの皆様,そして陰で支えてくださったすべての皆様に心より感謝の意を表する。